

## 【第一曲】プロローグ

### 月見草

毎日暑い夏日が続いている。

ここは人口三千人の、盆地の中にある証城寺村。

山中の狭い盆地の真ん中を大川が流れ、清流にはアユがそこかしこで石についた苔をかじり、その都度反転し、銀色の腹をなまめかしく光らせている。

早朝より釣り竿を振っていた私（氏原光）<sup>うじはらひかる</sup>は、日が昇り、暑くなつたので「やれやれ、そろそろ帰ろうか。今朝はアユのご機嫌が悪かつたわい」とつぶやき、竿を納めて、近くにある自宅に帰ろうと思つた。

「待てど暮らせど来ぬ人をゝゝ」と小声で歌いながら歩いていたところ、河原のそこかしこに月見草が首を伸ばし、しなびた黄色の花を咲かせていてのを目にし、その一本を摘み、空の魚籠に入れた。

「おーい、帰つたぞ」とぶつきらぼうに玄関で叫んだあと、私は黙つたまま診察室に隠れるように入つた。妻はいそいそと魚籠を受け取り、台所に行き、魚籠の中を覗き込んだ。底には、月見草の花だけが入つていた。

「今日の獲物は月見草だけだわ」と笑う声を聴き、私は苦々しく「女には風情というものが分からん」とこぼすのである。



古ぼけた診察室に首だけのぞかせて、これまた古ぼけた狸顔のナースが「氏原先生、患者さんが一人だけ朝から待つておられますよ」とぶつきらぼうに言う。やれやれ、仕事を始めようか。

誰にも隠しているのだが、私は昔、狸だった。京都府久米仙人郡証城寺村の山中に住んでいたが、『老いの昆布味』の本の中で述べているように、ありえないことだが、人間の胎児に入り、すり変わることができた。いわゆるハーフであるが、人間として成人し、医師になつた。

私、氏原光は、もともと精神神経科医であつたが、九州狐狸総合病院を定年退職したあとは、故郷の証城寺村に帰つて開業医となつた。七十八歳となり、専門医を捨て、何でも屋として診療している。家は江戸時代よりの古民家で、祖先は醸造業と医業を営んでいたので、広い敷地には醸造蔵があり、暗い室内に入ると、未だにコウジカビの匂いがする。

敷地の中を小川が流れ、ついさきほどまでの六月から七月にかけて、螢が舞つていた。夜にはカジカ蛙が神妙に鳴いている。

迷医だが、田舎ではまれな精神科医師として、近隣の市町村にある老人介護施設にも呼ばれ、往診にしばしば出かけて、老人と話し込むことが多い。

暑いせいか、患者さんは一人だけで、後は何もない。

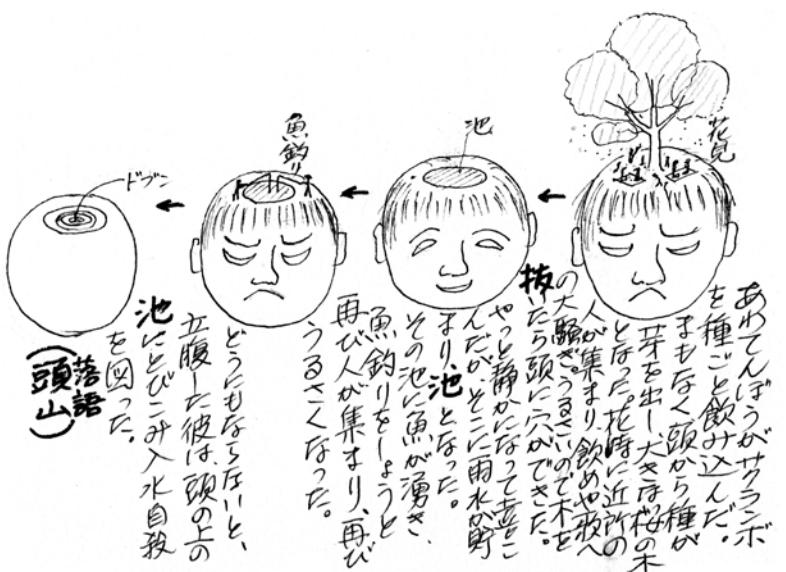
やぶ医だけに、裏山には竹藪があり、年中、門前にはたくさんの雀が群れている。毎日パンくずや飯粒などを撒いてるので、周辺の雀社会に情報が伝わったのか、朝から餌の催促をするかのように屋根や木々の枝で姦しく叫んでいる。餌をやると、雀たちは警戒しながら徐々に近寄ってきては、すぐに飛んで逃げるふりをして、最終的には我勝ちに餌に群がり、忙しなく食事している。昔であれば、この周囲に雀羅じやらでも張つておけば、数百匹のたくさんの雀が一網打尽に捕れただろうにと、意地悪爺さんの想像だけはするが、雀には黙つている。

妻に、「雀をたくさん救つてゐるから、お前は雀屋敷に招待されるはずだ。その時、帰りのお土産をどうするかと雀に尋ねられたら、必ず小さい方の葛籠つづらを選ぶのだぞ」と伝えている。妻は「そだね。ハイハイ、そうします」と軽く返事する。貴重な飯粒を練つて水で薄めて糊にしていた頃があつたのだ。

釣りの収穫がなかつたので、ついつい妄想にふけってしまう。

『頭山』という、江戸時代のシユールな古典落語を聴いていると、子供時代のことが蘇つてくる。

証城寺村は大川と小川に挟まれていて低地だが、昔、大雨が降ると溝がすぐに氾濫し、小川と道路の区別がつかなくなることがよくあつた。雨が止むとすぐに手綱を持つて出て、道路上をパチャパチャと



泳いでいる川魚を獲るのに夢中になつた。普段、手網で獲れる川魚はメダカやドジョウやギギといった小魚であるが、氾濫したときはかなり大きな魚がアップアップしているので、掬<sup>すく</sup>いやすい。一時間後には、道路上の水は引き、後には大小の濁った水たまりがほうぼうに残されていた。

そのような穴ぼこに水が溜まつた庭で、釣り竿を自宅の窓から庭先に神妙に垂らしている近所の老人がいた。私が「おじいさん、ここでは魚は釣れないよ。今日できた水溜まりだから魚はないよ」と言うと、「分かつておるわい。ほれ、針がついてないだろ。釣れるかどうかはわからないけれど、こうして、わくわくして期待して待つているのがいいのじや」と、顔をくしやくしゃにして笑つた。

この歳になると、あの老人の心境がやつと分かつてきた。何かを待つてているという時間が貴重なのだ。自然に遊ばせてもらつてているのだ。魚は釣れても釣れなくてもいい。橋の上から魚が泳いでいるのを見るだけでも面白い。

メダカの学校があるらしい。小魚社会は常に頭を上流に向けていて、群れの形は常に変化しながら、下流に流されないようにしてしている。人間の必死に生き抜こうとする姿と似ている。

妻と一緒に橋の上から魚影を見ていると、少年が後ろから覗きこみ、「おっちゃん、何を見ているの。何か面白いものがあるの」と話しかけてくる。「魚を見ている」と言うと、「フーン、そ

んなものが何で面白いのか」と馬鹿にして、サッカーのユニホームを着た少年がボールを蹴りながら去っていく。今では川で遊ぶ子供はいなくなつた。

午前中のいつもの診察がやつと終わると昼休みの時間。冷やし素麺の昼食後、少しごろんと休み、三十分後、日課の散歩の時間になるが、暑い季節なので熱中症になりやすいので無理はできない。しかし、散歩の道中に見た自然の様子や、経験したことを探し老人介護施設に入所している方たちに話すことにしているので、できるだけ外に出かけるようにする。

いろいろな故障を抱えて不自由な状態になっている老人は、何も言わないことが多いが、実は思慮深く、遠慮しながら人のお世話になり、感謝しながら生活している。多くの方は青春の心を忘れたかのように老成した姿をしているが、実は、よく話を聴くと、昔の青春時代のこと鮮明に覚えていて、懐かしく話してくださる。子供心は老いてもいきいきと残存している。それが老人を密かに底で支えている、と私は思つてゐる。私もまぎれもなく老人になつたので、子供心に帰つて、一緒に楽しんでいる。

これから先に待ち構えていること、終末は、言われなくとも誰でも分かつてゐるので、それは話題にせず、現在、生きてることを面白がつて楽しむというのが、私の流儀だ。  
先日の散歩中の様子とカラスとの遭遇の話をしておこう。

## カラスの言葉

「カラスなぜ鳴くの カラスは山に 可愛い七つの子があるからよ かわいゝ♪」という童謡がある。歌うたびに心優しくなり、夕暮れの郷愁を誘う。

私の診療所のある証城寺村の北には、田んぼと段々畑が山際から下に向かつて緩やかに広がっている。森になつていて丘陵に沿つて曲がりくねつた、馴染みの散歩道がある。ため池も点在し、大きなモクレンや辛夷や櫛の木が、生い茂らせた葉で心地よい木陰を作っている。

猛暑の昼休みの時間、日傘代わりのこうもり傘をさし、汗を流しながらそこを歩いている私を想像していただきたい。道より一メートル低くなつた所に果物畠があり、西瓜などが大きな実をつけている。うまそうだ。

大きな鳥やイノシシ、狸などの獣の食害を防ぐため、その畠全体に粗い網目の黒い網が張られている。鳥が裾から簡単には入り込めないよう、地面との間に隙間がないように網を外側に巻き、地面と密着してある。網の中は竹材で支えられ、空間ができる。

いつものようにその傍にさしかかると、山際の樹にハシブトガラスの大群が集まり、大音響で

怒鳴つている。周囲の山からも続々とカラスが集合している。何事であろうかと訝つた。<sup>いぶか</sup>

網で覆われている畠をよく見ると、一羽のハシブトガラスがその中にいて、網の裾の所で首だけを網目から外につきだして、脱出しようと必死にもがいている。手足や羽根が網に絡まり、羽根が抜けて飛び散り、どうにもならず絶望的な絶叫をあげている。

その状況を見て、「試行錯誤し、網裾の下を工夫してうまく潜り抜け、中に侵入したのだが、食事をすませて脱出しようとすると、（何かに驚いて焦つたのか？）荒い網目の裾に首を突っ込みそこを通り抜けようと試みた。が、しかし、首は通つたが体が引っ掛かり、パニックとなり、もがいている」と私は推測した。

その悲劇の一羽のカラスのすぐそばの地上に、たくさんのカラスが荒々しく口ばしを尖らして必死に叫び、助け出そうと試みている。うろうろ動いているが、どうにもならない。近くの樹上では数百～数千羽のカラスがその状況を忙しなく見守つており、「ギャー・ギャー」と叫んで、大騒ぎである。その声を聴いたのか、遠くの山から次々

